

令和 6 年 6 月 11 日現在

機関番号：16101

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K14918

研究課題名（和文）神社を介した非居住者による地域活動の展開に関する研究

研究課題名（英文）DEVELOPMENT OF COMMUNITY ACTIVITIES BY NON-RESIDENTS THROUGH SHRINES

研究代表者

森田 椋也（MORITA, Ryoya）

徳島大学・人と地域共創センター・講師

研究者番号：60801272

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000円

研究成果の概要（和文）：コロナ禍に対応し、研究代表者が在住する徳島県内の特徴的な事例を主たる研究・参与観察の対象とした。海陽町の轟神社では、神社とその祭祀を支える「担い手」が人口減少の進む従来の氏子区域に依らず存在し、普遍的な教訓を伴う文化資本としての当該神社の対外的な価値づけや情報発信の経緯が捉えられた。これをふまえた徳島大学・合同会社みつくるまによる共創事業「海部川流域文化継承プロジェクト」を2022年度より始動し、2024年度以降も継続して取り組むに至っている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

今後人口減少・高齢化の進む地域社会においては、「地域づくりを担う可能性のストック」として地域外の人間（非居住者）との継続的な関係を築くことが重要な戦略の1つとなる。本研究で注目する神社の「崇敬者」は、神社の護持のみにとどまらず、神社を擁する地域社会の持続再生にも貢献し得る存在である。上述のような社会関係を構築する手だてに関する具体事例をもとにした研究蓄積として、本研究は意義を有する。

研究成果の概要（英文）：In response to the Corona disaster, a characteristic case in Tokushima Prefecture, where the principal investigator resides, was selected as the main object of research and participant observation. At Todoroki Shrine in Kaiyo Town, the “bearers” of the shrine and its rituals existed regardless of the traditional Ujiko area where the population was declining, and the process of external valorization and information dissemination of the shrine as cultural capital with universal lessons was captured. Based on these findings, Tokushima University and Mitsuguruma LLC launched the “Kaifu River Basin Cultural Inheritance Project” in 2022, and have continued to work on this project since 2024.

研究分野：地域計画

キーワード：神社 非居住者 崇敬者 外部支援者 間繋 交流・協働

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

我が国に高密に立地する宗教的な文化資源として神社の存在が挙げられる。多くの場合において、神社を支える主体は地域内の「神職」や「氏子」が中心であるが、今後人口減少・高齢化の進む地域では、地域外の「崇敬者」とも積極的に関係を築いていくことが、神社の護持、ひいては神社を擁する地域社会の持続再生にもつながり得ると指摘されている。しかしながら、そのような関係構築の手だてについて研究蓄積が十分であるとは言いがたい。

2. 研究の目的

- (1) 我が国における神社を介した非居住者による地域活動の展開状況の把握
- (2) 神社を介した非居住者による地域活動の展開過程の把握
- (3) 神社を介した非居住者による地域活動の促進要因の解明

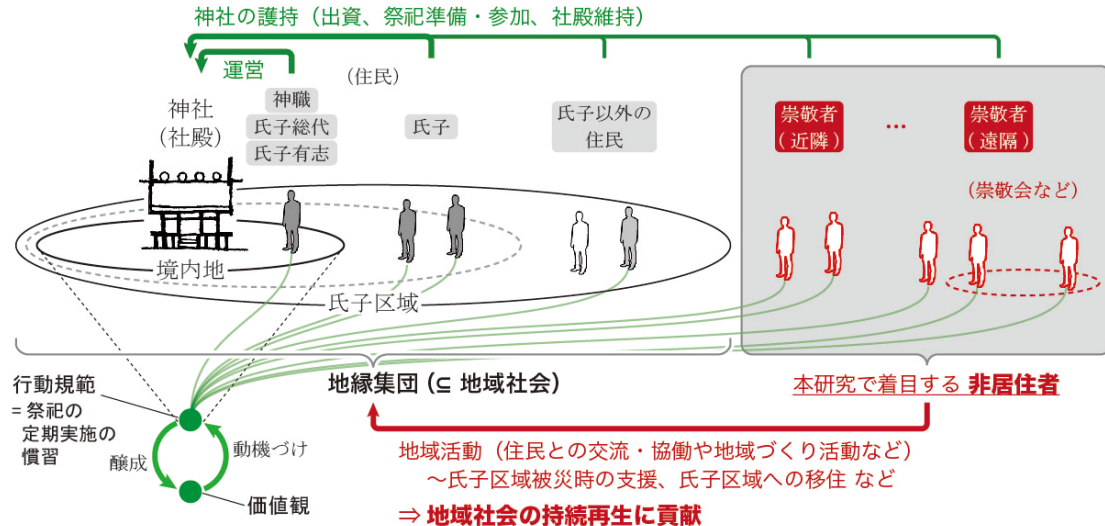


図1 本研究で着目する非居住者、神社、地域社会の基本関係図

3. 研究の方法

(1) ウェブ・文献調査(神社業界に関連する専門紙である『神社新報』を含む各社新聞記事など)を通じて、参拝や在来の年中行事参加にとどまらない非居住者の活動が確認できる事例を収集し、全国の概況を把握する。

(2) (1)の成果をもとに、事例調査を行う対象を抽出する。抽出した事例の関係者へのヒアリング調査により、多主体連携の地域づくり活動に関する先行研究等を参考にしながら、地域活動の展開過程を整理する。

(3) (2)の成果をもとに、神社を介した非居住者による地域活動の促進要因を解明する。特に、神社を介した非居住者による地域活動が結果としてどのように地域社会の持続再生に寄与したかという点と、地域活動が展開する過程においてどのような社会関係が構築されているか、またどのような空間(神社境内地~周辺地域)が用いられているか、といった点に留意して分析する。

4. 研究成果

(1) 日本全国で開催される神社仏閣の祭事にボランティアとして人材を送り出すプラットフォーム(一般社団法人第二のふるさと創生協会による「全国お祭りお手伝いプロジェクト」)が2020年に公表されるなど、神社を介した非居住者による地域活動を創出しうる動向を確認した。

しかしながら、本研究の実施期間は、新型コロナウイルスによる社会活動全般の自粛が続いており、多人数が集まる祭典が中止となったり、本研究の調査対象となりうる地域活動も多くが変容を余儀なくされているであろうこと、あるいは、地域外からの非居住者の訪問、ならびに受け入れ先神社・地域での非居住者の受け入れの双方が困難になっていることが想定された。こうした不確実な状況に対応すべく、研究実施2年目以降は、全国の状況と各地の事例を調査する形態ではなく、都道府県をまたぐ移動を伴わない形で現地調査が実施可能である、研究代表者が在住する徳島県内の特徴的な事例を選定し、主たる研究・参与観察の対象とした。

(2) 徳島県勝浦郡上勝町市宇集落の八坂二ノ宮神社では、先行調査の資料を取得、調査時現在の氏子らへの聞き取りを実施した。牛馬の神が祀られ、かつては競馬や相撲が行なわれたり、農

家が牛を連れて参拝に来ていたこと等の歴史性を有することが把握された。これをもとに、同集落協力のもと、自然にあふれる音をテーマとしたイベント「もりのおと」を開催し、研究代表者自身が非居住者の1人として地域活動への参与観察を行なった。この成果は令和3年(2021年)度地域連携事業成果報告書にて情報発信した。

(3) 徳島県海部郡海陽町の轟神社では、氏子総代と神職への聞き取りを実施した。江戸時代の阿波藩主蜂須賀家が代々海上安全祈願のため参拝に訪れた史実があり、阿波藍の海上交易を支えた(舟材の供給を担った)海部の林業ともつながりの深い神社である。山の民・海の民(山師/農家/漁師)がともに自然の恵みに感謝する、年に一度の例大祭が400年以上継承されている。

当該神社とその祭祀を支える広義の「担い手」は、調査時現在、人口減少の進む従来の氏子区域の範囲に依らず存在している。この要因として、神職や総代による普遍的な教訓を伴う文化資本としての当該神社の対外的な価値づけや情報発信の経緯が捉えられた。このような社会的状況に応じた当該神社の様態変化は、神職や総代らによる慎重な合議のもと進められてきたことも併せてうかがわれた。

轟神社を含めた海部川流域では、2021年度の文化庁事業を皮切りに文化資源の高付加価値化に取り組みされており、今後は同地域での多様な活動展開と来訪者の増加が期待されている。研究代表者は、徳島大学と「合同会社みつぐるま」(轟神社存続や周辺環境の保全・改善に取り組む組織)による共創事業「海部川流域文化継承プロジェクト」(徳島大学2022年度「SDGs研究推進支援事業」、同学2023年度「地域課題解決プロジェクト」事業)を立ち上げ、神社境内地への看板の設置、食事室の改修などを、建築を学ぶ大学生のデザイン教育を兼ねて実施した。

(4) 当研究の期間全体を通じて得られた展望として、人口減少の進む地域社会の持続再生に寄与しう、当研究で当初から着眼していた神社の特性に加えて、相互生成関係にある環境と文化のありようをより高い解像度で読み解く「作法」として神社祭祀を捉える視座について検討余地があると考えている。この視座を論じるにあたっては2022年度研究成果に含まれる「間繫」(かんけい:生生と「間」が繋がれてゆくこと。研究代表者による造語)概念の精緻化も重要である。

前述の轟神社における教育・研究・社会貢献の有機的連関の取り組みの実践・参与観察を通じて、「間繫」論についてさらなる深化・敷衍を図り、神社以外の文化資源にも汎用性のある地域マネジメント論を導く予定である。

(5) 新型コロナウイルスの影響が比較的沈静化した時機を活かし、次の2つの事例調査を実施した。

東京都台東区浅草の浅草神社における行事「夏詣」での奉仕活動への参与観察を実施した。一般社団法人「第二のふるさと創生協会」による「全国お祭り手伝い隊」派遣事業の一環で実施された標記の奉仕活動に隊員として参加し、受け入れ主体や他の参加隊員へのヒアリングを実施した。主たる活動内容は参拝者の案内、誘導、ワークショップ実施補助であり、あわせて社殿や境内施設、由緒についての説明を宮司から受けることができるものである。それまで縁のなかった神社と潜在的な崇敬者の間に具体的なつながりをもたらす点において、今後さらに広い展開が期待される取り組みであり、引き続き動向を注視していきたいと考えている。

また、奈良県吉野郡天川村の天河神社における崇敬者(音楽家)による奉納演奏、宮司との対談会に参加した。当該神社を介した非居住者による地域活動の展開については森田ほか(2019)<sup>①</sup>にて明らかにしているが、神社との関係が一旦疎遠になっていた遠隔の崇敬者が、再び当該神社へ関与することとなった事例として、その経緯を把握した。この点において崇敬者は、「『地域づくりを担う可能性のストック』として継続的な関係を築くこと」<sup>②</sup>が肝要であるとされる「関係人口」と同じ性質を有するものと捉えることができる。この側面についても引き続き事例を収集し、考察を深めたいと考える。

(6) 本研究の活動期間を通じて得られた成果は、非居住者の往来による地域社会の変容過程をとらえた研究等として、査読付き論文3件、学会発表5件を含む学術的知見として対外的に発信した。

#### <参考文献>

- ① 森田 椋也、後藤 春彦、山崎 義人、地域における非居住者による講を通じた活動の展開に関する研究 -奈良県吉野郡天川村の天河大辨財天社を事例として-、日本建築学会計画系論文集、84巻761号、2019、pp. 1589-1599
- ② 野田 満、関係人口の再考に関する一試論、2018年度日本建築学会大会(東北)農村計画部門パネルディスカッション資料「農山漁村を動かす人々、『〇〇ターン』と地域組織・地域再生のこれから」、日本建築学会農村計画委員会、2018、pp. 75-78

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 TOGASHI Ryota, GOTO Haruhiko, MORITA Ryoya, YAMAZAKI Yoshito	4. 巻 88
2. 論文標題 SIGNIFICANCE OF ABANDONED SPACES IN THE CLOSED MINE AREA IN THE ANTHROPOCENE	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Journal of Architecture and Planning (Transactions of AIJ)	6. 最初と最後の頁 1259 ~ 1270
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3130/aija.88.1259	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 泉川 時、後藤 春彦、吉江 俊、森田 椋也	4. 巻 87
2. 論文標題 1990年以降の東京における神社をめぐる都市開発とその経緯 - 東京都区部の神社の空間分析および開発経緯のオーラルヒストリーから -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本建築学会計画系論文集	6. 最初と最後の頁 842-853
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3130/aija.87.842	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 山川 冴子、後藤 春彦、森田 椋也、山崎 義人	4. 巻 55
2. 論文標題 北海道天塩郡豊富町における湯治者と地域社会の関係の段階的変容	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 都市計画論文集	6. 最初と最後の頁 1173 ~ 1180
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11361/journalcpj.55.1173	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 丸田康平, 森田椋也
2. 発表標題 移住者が運営するゲストハウスによる地域活性化に関する研究 - 愛媛県佐島「古民家ゲストハウス 汐見の家」における管理者と地域住民との交流の変遷に着目して -
3. 学会等名 日本建築学会大会 学術講演会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 森田 棕也
2. 発表標題 地方大学による大学生と働き手不足地域をつなぐプラットフォームづくり -徳島大学地域再生塾プロジェクト「なからく~那賀で楽しくはたらく~」の初年度活動報告-
3. 学会等名 日本都市計画学会中国四国支部研究発表会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 吉田 充希, 森田 棕也
2. 発表標題 「臨床の知」及び「印象景」概念を手がかりとした風景生成メカニズム描出の試み
3. 学会等名 日本建築学会大会 学術講演会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 森田 棕也
2. 発表標題 超世代的“間繋”のパーспекティヴ - 放擲された空間とのつきあいかたを手がかりとして -
3. 学会等名 2022 年度日本建築学会大会(北海道)農村計画部門 研究協議会資料「世代の継承に向けて - 少人数社会のかたち - 」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 泉川 時、後藤 春彦、吉江 俊、森田 棕也
2. 発表標題 都心回帰下における神社をめぐる都市開発の経緯とその空間変容
3. 学会等名 2020年度日本建築学会大会(関東) 学術講演会研究発表
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

鎮守の森賦活プロジェクト@徳島県勝浦郡上勝町市宇集落（徳島大学サテライトオフィスの取組事業）  
<https://www.tokushima-u.ac.jp/docs/37255.html>

海部川流域文化継承プロジェクト@徳島県海部郡海陽町（徳島大学共創実践事業）  
<https://www.tokushima-u.ac.jp/docs/55117.html>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------